

【床の間コーナー連動企画】

エイブル倶楽部 公開講座

鹿島ふるさと探訪（古枝地区の歴史を訪ねて）

- ・日 時 平成27年11月19日(木)9：00～12：00
- ・順 路 古枝公民館⇒中尾天満宮⇒鳴瀬峠・嶽水道⇒儀助平洞穴⇒鮎越堤⇒山祇神社
- ・講 師 鹿島市民図書館 学芸員 高橋研一
- ・説明内容 次のとおり

浜川が育んだ古枝地区の歴史

講師：鹿島市民図書館 学芸員 高橋研一

《鹿島ふるさと探訪開催にあたって》

この企画は、エイブルの床の間コーナーで開催中の「かしま再発見～古枝編～」の関連事業です。今回、古枝地区の展示をする、案内するという時に、私たちは“浜川”を中心に据えて考えました。

古枝地域の歴史は、もともと台地であったところを浜川の流れが侵食して、谷ができ、そこに人々が住み着いたところから始まりました。谷筋と台地の中で、水流、あるいはいろんな気象条件を見ながら、この地に適した生業（なりわい）を見つけて生活してきたわけです。

浜川の流域にあたる中尾・上古枝・下古枝・大村方・久保山の平地部分は田んぼが多く、非常に恵まれた地域でした。それに対して、久保山や鮎越の台地部分は、どうしても水が行き届かない、そのため開発や定住が進みませんでした。それが江戸時代になって、3代藩主鍋島直朝の時に水道が引かれて、それぞれ両方の台地に水が行き届いて開発が進みました。

川は恵みをもたらしてくれる半面、非常に災害、水害や土砂崩れなどの危険性を有しています。浜川はかつて普明寺の所を通して石木津川に流れ込んでいたり、水流が洪水のたびに、この谷筋を行ったり来たりしながら、今のところに落ち着いてきた経緯があります。そういう中でこの地域は暮してきたわけです。

こうした浜川の恵みと脅威を共有する流域の村々は、ともに流域を生きるための知恵と工夫により、豊かな自然環境と歴史を現在に伝えています。

《小野原虎吉像(下古枝区・古枝公民館敷地内)》

この石像は30年にわたって古枝の村長をされた小野原虎吉の肖像です。古枝のJAにあったのですが、今年6月にここに移転しました。古枝地区には虎吉とみかん栽培の先駆者田島勝爾の2人がこうした石造肖像となっています。こういう肖像を造るのはそれだけ地域にとっても顕彰する功績のあった人物ということになります。

虎吉は明治22年(1898)古枝村会発足時に村会議員となり、さらに明治33



小野原虎吉石像

年から昭和7年(1932)まで34年間にわたり村長を務めるなど、近代の古枝を支えた大人物でした。地域の政治や経済、文化を主導した地域社会の指導者は地方名望家と呼ばれますが、虎吉は古枝を代表する地方名望家だったのです。

虎吉の屋敷は祐徳稲荷神社の対岸にあり、浜川に面していました。和歌や漢詩をたくさん詠んでいますが、和歌の場合は「水里」という雅号を用いています。また自分の家を「水石居」と号しています。虎吉が浜川の清流を愛でていたことがうかがえます。

古枝地区は、小野原姓が多いイメージがあると思いますが、もともと小野原姓は、鹿島藩の獵師組、鉄砲の所持を許されて獵をする武士集団がここに配置されていたためです。山口姓や尾崎姓も獵師組です。鹿島藩が獵師組を配置したのは、古枝と山を挟んだ能古見の谷筋です。何故かという、鹿島藩の場合、北と南は佐賀藩で、東は有明海に面しています。しかし、西だけは他藩である大村藩に接しています。そのため、万一大村から攻め込まれたときの最前線として、古枝と能古見の谷筋に獵師組が配置されたのです。残りの藩士は常広城があった北鹿島に集住しています。そういうことが古枝に小野原姓が多い理由になります。

《中尾天満宮(中尾区)》

中尾天満宮は延宝年間(1673～1681)に建てられた神社です。昔は神仏習合の時代なので、興善院と一体となっていました。1670年代に分かれて、現在の地に神社が創建されました。神殿には、鹿島市の重要文化財に指定されている神像と狛犬が納められています。神像の背中に永禄4年(1561)という墨書があります。鹿島の中でも相当古い木造彫刻になります。狛犬もおそらくそれと同じ時期くらいに付随してつくられたものだろうとされています。

拝殿の前には昭和6年の天満宮の改築碑があります。特に、古枝地域の中でも中尾は非常に有名な人を輩出している地域です。改築碑には寄付金を奉納された方々の名前が刻まれています。尾崎天風(北海道で活躍した政治家)、森隼三(宝塚音楽学校の初代の校長)、小野原虎吉の名前が見られます。こういう改築碑を見ると、当時の村にかかわった人、あるいは村の出身者を一堂に知ることができます。

神社に行くと、石造物がたくさん祀られていることがあると思います。圃場整備とかで動かされたものが、地域の公の場所に移動してくるわけです。何気なく見てしまうのですが、中には地域にとってものすごく大事なものが含まれたりしています。その一つが延享4(1747)年8月に建てられた「八大龍王碑」です。少なくとも寛政4年(1792)には中尾天満宮にあったことが確認できます。他の場所から移動してきたのではなく、最初からこの場所に建てられた可能性が高いと考えています。

さて八大龍王は雨の神様です。八大龍王を祀るときは2つあります。一つは、雨が降りすぎて洪水が起きているから雨を止めてくださいとお祈りをする場合と、それから雨が降らないので雨を降らせてくださいとお願いする場合です。

この「八大龍王碑」が重要なのは、浜川の流域の村々が共同して建てたことです。ここに古枝地区の大村方村・古江田村・与方・鮎越・久保山村・中尾村、浜地区の八本木村・湯峰・籠方・開浦村の村名が刻まれています。このような複数の村が共同して造立しているのは稀な事例です。この石碑は古



八代龍王碑

枝の人々が浜川水系を生きる人たちとつながり生活していたことを象徴しています。浜川をみていく上で、ものすごく大事な、地域と地域をつなぐ石造物になります。

《嶽水道(中尾区・奥山区)》

嶽水道は浜川から鮎越区の鮎越堤まで引かれている水道です。嶽水道は2つあって、上水道と下水道と呼ばれます。上水道は奥山区の赤岩から、下水道は中尾区の鳴瀬から取水しています。鳴瀬は浜川を挟む山と山の間が一番狭くなっているところです。水の音が激しいので、鳴瀬という地名が付いています。

(道路から少し下った)ここが嶽水道(下水道)の取水口です。堰を作って水をくみ上げていきます。取り過ぎた水は戻すような仕組みになっています。水道の脇には点検用の道が整備されており、水道全体を歩く事が出来る様になっています。



嶽水道(下水道)取水口

これまで嶽水道がいつ造られたのかは、はっきりした年代は書かれてきませんでした。だいたい3代藩主の直朝公の時に造ったと言われているのですが、漠然とした表現にとどまっているのが現状です。しかし今回、いろんな古文書の調査をする中で、初めて嶽水道をいつ造ったのかがわかってきました。それが、天和元年(1681)の暮れ、稲刈りが終わった後から、天和2年の春、次の稲を植えるまで、その間にこの水路を掘ったという記述が出てきました。これまでは平尾水月の覚書によってだいたいこれくらいだろうと推測してきたことが、初めて古文書によって造られた年代がわかったのです。

《鳴瀬峠と権現森(中尾区・奥山区)》

鳴瀬峠は鹿島藩と佐賀藩の境界だったところです。中尾までが鹿島、その上の奥山は佐賀藩になります。この鳴瀬は山と山の間隔が一番狭くなっている所です。以前は山の稜線が繋がっていて、峠になっていましたが、現在は開鑿され、切通しになっています。

鳴瀬から奥山に進むと、赤岩公民館の隣に奥山分校跡があります。奥山分校はもともと七浦小学校の分校でしたが、昭和33年に古枝小学校の分校になります。昭和46年に奥山分校は廃止されますが、その時に奥山が出した条件が麓までバスで下れることでした。そのため、バスを通すために、掘削されて今の道幅になっています。



鳴瀬峠

今は鹿島市、特に同じ古枝地区になっていますが、奥山区や竹ノ木庭区は他の区と歴史的な由緒が全く違う所だったので、それぞれの中に意識的な差がしばらくは残っていました。戦前、奥山の人たちは役場にしろ、小学校にしろ、七浦に行きます。昭和40年くらいに奥山出身の方が回想記を出されているの

ですが、中尾のスーパーに買い物に行くのは見知らぬ人にたくさん見張られているようで怖かったと書かれています。江戸時代の 270 年間、政治的分断によって形成された所属意識が藩が無くなって半世紀経っても残っていて、奥山の人たちの意識の中では中尾は全く違う生活圏であったことがわかります。

鳴瀬峠を過ぎて、浜川にかかる橋を渡ると、権現森があります。権現森は「大権現」の石祠を祀っています。寛政 4 年(1792)に松岡神社の宮司が鹿島藩に提出した文書には権現森が「奥山赤岩・鳴瀬ノ間、佐嘉・鹿嶋御境所」にあり、享保 4 年(1719)に建立された石祠があると記されています。この文書によって、権現森が、佐賀藩に属する奥山・赤岩と鹿島藩に属する鳴瀬(中尾区)の境界を祀る、とても重要な場所だったことがわかります。

鹿島の石造物を紹介した『鹿島の石造文化』に収録されていないため、これまで奥山以外の人達には知られていませんでした。今回、エイブルの床の間コーナーで古枝地区の展示をするため、たくさんの人に協力いただいて、聞き取り調査を実施しました。その時に、奥山の方から教えていただいたのが権現森です。もし既存の本だけで企画をしていたら知らないままで終わっていたと思います。

鳴瀬峠や権現森は、車で通るとそのまま通過してしまいそうですが、歴史的に由緒のある場所です。多くの方は鹿島市全体が鹿島藩だったと思われるかもしれませんが、七浦や西牟田は佐賀本藩領、北鹿島の三部・井手は蓮池藩領、能古見の山浦(深江氏)と浅浦(嬉野氏)は佐賀藩士の所領でした。そのため、いろんなところに、鹿島藩とそれ以外の藩の境界線があって、その境界線を示すものがたくさんあったはずなのですが、圃場整備の進展等によって、境目がどんどんわかりづらくなっています。そうした中で、鳴瀬峠と権現森は境界のあり方や信仰を現在に伝える、とても貴重な場所なのです。

《儀助平洞穴(平仁田開拓)》

儀助平洞穴は昭和 47 年(1972)、ここを遊び場に使っていた東部中学校の生徒が先生(佐々木勝先生)に紹介して初めて世に知られた遺跡です。安山岩の根元にちょっとしたくぼみがあって、そこに人が住み着いたところで、鹿島最古の遺跡です。縄文時代の土器や石器などが出土しており、現在は祐徳博物館の考古室で展示されています。元々ここは竹ノ木庭区の区有林でした。平仁田開拓は戦後できた開拓地です。だから、今でもここを竹ノ木庭区と言ったり平仁田開拓と言ったりして表記にずれがあるのは、そのためです。



儀助平洞穴

鹿島の平野部では、人々の生活の痕跡が度重なる開発や水害によって失われてしまっています。そのため儀助平洞穴は鹿島における人々の生活の始まりを知ることができる大変貴重な遺跡となっています。

儀助平という名前は俗称で、小字ではありません。平という字は、開墾とかで切り開いた土地に付くので、儀助という方が開いた土地なので儀助平と呼ばれていたと思います。ただ儀助平の由来などはほとんど残っていません。本来の所在地を採ると、平仁田遺跡になるのだと思いますが、ここが発見されたときに、地域の人たちが儀助平と呼んでいたのが、儀助平洞穴と呼ぶことになったのです。

《鮎越堤(鮎越区)》

浜川の上流域から取水された嶽水道が流れ込んでくるのが鮎越堤です。鮎越堤は上堤と下堤の2つからなります。

上堤には龍神の石碑があります。田植えの前には、区の方々が集まって龍神祭を行って、水の神様を祀っています。

これまで鮎越下堤は延宝3年(1675)にできた、そして上堤は下堤の完成後に出来たが年代は不明とされてきました。

しかし、今回の企画展示に当たって、古文書の調査をする中で、鮎越堤と嶽水道の成立年代が判明しました。まず、上堤は直朝が造ったと言われてきたのですが、最初は寛永年間(1624～1645)に家老であった田中安心によって作られました。

田中安心は鹿島藩の中でも別格の武士で、島原の乱の時には藩主に代わり鹿島藩を率いています。それ程、鹿島藩の藩政を一手に握っていた人です。ただこの時は堤を掘り、雨水を溜めるだけだったので、保水も悪く雨水がすぐ抜けるため、しばらくして放棄されたみたいです。

そこで、直朝公が延宝6年に下堤を新たに造り、放棄されていた上堤も整備し直します。そして、浜川上流に取水口を設け、水道を引いてきたのです。直朝はまず堤を造り、経過を観察した上で、水道を引き、水を溜めたことがようやく分かってきたのです。

江戸時代の古文書を見ると、鮎越の地名はほとんど「籠(こもり)」と付いています。「籠」は海の干拓というイメージを持たれると思うのですが、山間部でも川や水利によって切り開いた土地は「籠」と呼ばれていたのではないかと思います。鮎越堤と嶽水道の水を頼りにある程度有力な人たちが点在をして、各地域を切り開いていく、それでそれぞれのところが「籠」と呼ばれているのではないのでしょうか。



鮎越堤 (下堤)

《山祇神社と祐徳稻荷神社(上古枝区)》

山祇神社は上古枝と下古枝の氏神様です。

拝殿に掲げてある「山祇社」と書かれた扁額は、元禄15年(1702)に鹿島の4代藩主鍋島直條公が奉納したものです。側面には絵馬、天井には絵が奉納されています。

山祇神社は、愛媛県の大三島にある大山祇神社という海の神様を勧請した神社になります。山と付くから山の神様というわけではなくて、海の神様として勧請されたのです。おそらくここも水運を通じて海につながっていたのだと思います。

石段が後ろの方に長く続いています。昭和3年にここに移ってきているので、以前はもう少し上



山祇神社

の方に社殿があったものと思われます。祐徳稲荷神社と山祇神社は地盤が固いみたいです。もう少し道をそれると、腐葉土になっていて、滑りやすく、土砂崩れが起きやすい場所です。ですから、神社が建っている場所は固い地盤を選んで建てられています。

直朝公の妻であった祐徳院（萬子姫）さんは山腹の岩を穿ち、その中で亡くられました。それが現在の石壁社です。祐徳院さんは息子を亡くした後、黄檗僧となります。当時、黄檗宗は最新の流行でした。しかし、祐徳院さんは当時の流行だったり、ファッションとしての黄檗僧としてではなく、ものすごく厳しい修行を行い、黄檗僧としての印可を受けています。そうすると、当時、この場所は山林修行をするための人里離れた場所だったのかも知れません。鹿島の中心であった北鹿島の常広城から距離を取って、修行僧として生きる決意の表れが祐徳院（寺院）に入るといったことだったのです。

それから、古枝地域の歴史を考える時に、祐徳稲荷神社の社会教育機能はとても重要です。戦前には、外苑にプールや野球場、境内に祐徳図書館が造られていました。戦後には博物館が造られています。当時、藤津地区にプールや野球場がどれ程あったかは分かりませんが、数少ない施設だったことは間違いありません。

そうした意味で、古枝地域が発展する大きな一つの柱に、祐徳稲荷神社の社会貢献事業があったことを忘れてはならないと思います。



浜川（祐徳稲荷神社付近）